

3月



あの日のあの川 リレー日記 ～第26話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどこの川でどんなことをした記憶がありますか？幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第26話主人公 坂本 貴啓

(筑波大学大学院 システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻 白川(直)研究室『川と人』ゼミ)

(□川ガール・■川系男子)

(出身地を流れる川：福岡県遠賀川)

「川系男子になった日」

いつのこと？：川系男子になるまで

どこの川？：遠賀川

2月号を担当した筑後川男子の藤原君から筑後川と遠賀川の流域界を越えてバトンが回ってきたので、お隣の流域育ちの遠賀川男子としては、謹んでリレー走者を努めたい。

僕は自他ともに認める川系男子であり、大学では川系男子の他に川オタクとか川キチとか川の奇行師など自虐的な呼び名で呼ばれることも多い。ここまで僕を夢中にさせている川だが、僕はいつ川系男子になったのか、回想の世界を走ってみた。

【少年期（幼少～小学校低学年）】

遠賀川流域育ちの父と筑後川流域育ちの母を持つ僕は北九州市の街中で男三人兄弟の長男として育った。近くに遊べる川がなかったので、夏場はよく遠賀川の支流の彦山川の源流部や遠賀川に遊びに行っていた。父は昔から遠賀川や近くの小さな川でよく遊んでいたようで、僕らによく竹を切り出して浮き釣りをさせた。遠賀川の潜り橋で兄弟3人並んで釣りをしていたら橋を通りかかったおばさん達に「まあ、今晚のおかずでも釣ってるの？」と言われて子どもながらに恥ずかしい思いをしたこともいい思い出。母は実家の山でよく遊んでいたようで、水辺の薬草や溪流に棲むドンコを岩陰に追い込み、捕まえるのもお手のものだった。大抵のものは大丈夫な母が水辺でヘビを見つけた



家族でホテルを見に行った記憶

時だけは一目散に逃げ出す。恐らく僕が、唯一ヘビが苦手なのはその影響を受けたものと思われる。夏の週末は川で泳いだり、釣りしたり、バーベキューしたり、ホテルを見に行ったりとよく川に出かけた。時には夕立が来て、急に川の水笠が増えて、靴が流され、怖い思いをしたこともあった。川が楽しいばかりでなく恐ろしさを持っていることはここで感覚的に学んだと思う。

この頃、街中から田舎に出かけて普段できないことをするのが楽しくてしょうがなかったのだろう。そういう意味ではここは川系男子になった日はなさそうだ。

【野生児期（小学校高学年）】

4年生になり、街中から郊外へ引っ越した。新たに宅地開発したニュータウンだったので、まだ家はポツポツとしかなく、周りも山や田んぼ、川が多く、僕には最高の遊び場となった。新興住宅地に建設予定だった小学校はまだできていなかったので、1時間かけて田んぼ道を歩いて小学校まで通った。僕にとっては最高の寄り道コースで、空になった水筒には、田んぼの水を入れ、カブトエビやホウネンエビを捕まえて帰った（泥水水筒に母激怒）。暗くなってもなかなか帰らず、母や先生を心配させるのも日常茶飯事であった。

高学年になると、よく友達の家泊まり合うことも増えた。この頃、オオクワガタの80mmオーバーを捕まえると1千万円するという話が世間でブームになっていたので、早朝にこっそり起きだして、住宅地外の川沿いのクヌギの木によく出かけた。暗い山の中のクヌギよりも光がよく当たる川沿いのクヌギのほうが大きいクワガタがいることを、虫取り少年達は経験的に知っていた。夜明け前の薄暗い時間の川沿いは、突然どこからか野鳥の鳴き声がしたり、草影がカサカサ動いたりして薄気味悪かったが、80mmの口マンの前にはそれも我慢できた。結局、その年の夏はヒラタクワガタの65mmが最高サイズだったが、引っ越し先で街中育ちの少年は野生児へと変革を遂げた。

この頃、野生児にはなったものの、興味の中心は虫を中心とする生き物だったので、川を中心に世界が回りだすのもここではなさそうだ。



川沿いのクヌギに昆虫採集の記憶

【科学部少年期（中学生）】

中学生になり、僕の入学と同じ4月に赴任してきた担任の理科の先生との出会いが僕を科学少年にした。入学まもないある日の放課後、学校内を散歩していると妙に立体的な木の葉をみつけた。木の葉のようで、木の葉でない。どうも何かの昆虫が入っているようだが、僕の知る範囲で知っている昆虫ではなかった。これはもしかすると、とんでもない発見かもしれないと淡い期待を抱き、担任の理科の小泉先生に尋ねた。小泉先生は「おーっ！これはすごい！先生も見たことない！ちょっと先生、これ持って今から自然史博物館に行ってくる」とそそくさと学校から消えた。一少年の疑問にここまで熱くなる先生もなかなかいない。他の生徒が「先生、朝、道にタヌキが死んでたよー！」と聞けば、生徒を自分の車に乗せて案内させ、タヌキの死骸を拾いに行き、「状態のいいタヌキでした」と喜び、博物館に持っていき、はく製にする。他の先生とはずいぶん違う変わった先生で、職員室に長い時間いるのは嫌いなようで、職員会議以外はいつでも理科室にいた。

先生は次の日、登校してきた僕を見つけるなり、坂本君、あれはね、真珠蚕（シンジュサン）という蛾の蛹だったよ。」と博物館の専門の学芸員に教えてもらったことを話してくれた。「先生、この学校でも科学部を立



第4回つくばジュニア発明展(優秀賞)

ち上げるから、君、よかったら入らんかね？」と、これが自然科学との出会いだった。本当なら僕は、この数日後に剣道部に入部届を出そうと用意していたのだが、この変わり者先生についていったら面白いことになるかもしれないという冒険心が勝り、新生科学部に入部届を出した。

ここからは科学少年の日々だった。放課後になると、すぐに理科室に行き、発明工夫展の作品作りや研究をした。科学部には年に一度、科学の甲子園と呼ばれる伝統ある「日本学生科学賞」に向けて、銅メッキで銅の結晶が析出する条件を研究したり、発明工夫展に向けて、太陽光を利用した温風乾燥機をつくったりと毎晩、最終下校時間の 21 時頃まで残って研究した。21 時まで残る部活といえば、野球部と科学部くらいだった。周りからしたら、なんで科学部が？と意外だっただろうが、僕らも野球部と同じように甲子園球児だったのだ。

休日も休みなく部活に行った。休日はよく先生の車に乗り、フィールドワークをした。先生は北九州市自然史友の会の水生部会の部会長を務めていたので、友の会の会員の方と一緒に開発予定地の用水路の生物調査をした。この頃出会った学芸員の先生やホタルの研究をする大学の先生、北九州高校魚部などが僕に今まで好きに虫取りをしていたのとは違う、フィールドワークの面白さを教えてくれた。

この頃、自然科学全般に興味をもつようになり、僕になんとなく、研究者になりたいと思わせた時期だった。そういう意味でも、川に固執していたわけではないので、川系男子になった日ではない。

【青春期（高校時代）】

高校に入学し、僕は遠賀川を渡って自転車通学をしていた。中学校での部活の充実感から、再び科学部を選んだ。しかし、そこで大きなショックを受ける。科学部はあったものの、活動内容は「普段は週に 1 度集まって雑談」これを知り、ショックを隠し切れなかった。たしかに科学部はじめ、文化系のサークルの多くは文化祭などを発表の場としているため、普段の活動時間は少ないのが一般的かもしれない。

そんなもやもやとした毎日を過ごしていた最中、高校 2 年生の 10 月中旬、川の水辺館のようなものが高校の近くの遠賀川にできるといふ噂を耳にした。

2004 年 10 月 23 日、遠賀川に架かる潜り橋を渡って、川の中州にあるガラス張りの建物を訪ねた。これこそが遠賀川水辺館で、オープンフェスタの日のこと

であった。賑わうガラス張りの建物の中に入ると、いきなり「あら、あなた高校生？」と学ラン姿の少年に、青いジャケットに白いスカート、赤いブーツを履いた女性が大きな声で話かけてきた。水辺館のゼネラルマネージャー野見山ミチ子さんとの出会いだった。水辺館出会った大人達はすごかった。魚おやじ、鳥おやじ、お花の先生、野草料理研究家、美術の先生、食事担当等々、みんなそれぞれが際立っていた。大人達はこの日、「ここを君たちのホームグラウンドとして自由に使いなさい。」といった。この一言が、中学生・高校生達が川に青春を捧げるきっかけとなった。僕は毎日放課後水辺館に通うようになった。その後、水辺館で出会ったホタル少女こそが中尾さん。お互いにホタルの話題で意気投合し、当時お互い高校が違うこともあり、水辺館を拠点に高校の垣根を越えたネットワークをつくらうとはじめたのが、YNHC（Youth Natural History Club；青少年博物学会）でした。2004 年 11 月 3 日文化の日、これが YNHC の設立記念日。設立後はホタル少女、水草マニア、石オタク、ものづくり名人……。一芸に秀でた色んな高校生が集まってきた。僕らは学校では少し変わり者扱いされることが多かったので、結構似た者同士だった。それからの高校生活、自由気ままに色んな企画をした。星空観察会、ベッコウトンボ調査、C.W ニコルさんの課外授業、ホタル実験水路づくり、全国川の日ワークショップで愛知県に初遠征、世界子ども水フォーラム等々に企画や参加をし、高校卒業までとにかく毎日が夢中であった。普通なら、高校生



高校生グループの活動 (YNHC)

の青春は部活に汗を流したり、友達と街に遊びに行き友情を深めたり、恋愛をしたりするのが一般的なんだろうが、僕らはそれが遠賀川であった。高校の先生からは「川にばかり行ってセンター試験の点数に1点も+にならないことはやめろ」とか心無いことをいう人もいたが、非行に走るわけでもなく、僕らは常に真剣であった。日々変わる川の風景、川を通して色々な学びができること、そして川を通して広がる人の輪。川と人が関係しあう日常を見るのが僕は何よりも楽しくてしょうがなかった。

川のその時々、人の多様な行動それぞれが変数になり、毎日新しい川と人物語を見る事ができるのは全く飽きない中毒的な魅力があった。僕は川だけが好きなのではなく、川と人がそれぞれに絡み合って展開されていく物語が好きなのだ。と高校生ながらに思った。この時僕は川系男子になった。水辺館と出会った2004年10月23日が僕を川系男子にした。

川系男子になり、僕の将来の夢は固まった。それがどんな職業なのかまでは分からなかったが、「川と人」を元気にするような仕事をしたい。そう思い、僕は夢を叶えるための武者修行の場に筑波大学の門を叩いた。筑波大学は僕に門を開いてくれた。遠賀川を旅立った春の日、別れ際に野見山さんが僕にこんな言葉をくれた。「あなたは遠賀川の子鮭、これから大海原を泳いで大きくなっていつか帰ってきなさい。」

遠賀川しか知らなかった僕はここで色々な世界を知ることになる。それからどうなったかについては、ここでのことは別の機会(川系男子の『川と人』めぐり)に書いてみたい。

前回の藤原君も、「筑後川」の曲の歌詞を載せていたので、僕も最後に、川系男子を魅了し続けている遠賀川のことを謳った「遠賀川」を紹介して、リレーを次の走者にバトンタッチしたい。僕は3月で博士課程を修了する。次の走者は4月から博士課程に入学する。このバトンは走者のこれからの研究生活へのエールだ。

遠賀川

(詩・曲：おおがたみずお、歌：ハル)



川の流れはおだやかに 春を謳うよ遠賀川
ゆれる菜の花背比べ あなたの顔が笑ってる
夏祭り 蝉時雨 川面に浮かぶ遠花火
手をつなぎ歩こうか 君が一番好きだから



川の流れは滔々と 秋を映した遠賀川
幼い日々をたぐり寄せ あなたのことを思い出す
冬景色 踊る雪 川面に溶けて春を待つ
肩を抱き話したい 君はどうしているだろう

この町で生きて行こう ここに私の夢がある
この川と生きて行こう ここが一番好きだから



※この曲は、遠賀川の自然環境・河川環境・生活環境等のイメージを地域に広めるために、制作されました。
歌は「ハル」という地元を中心に活動을続けてこられたデュオ歌手が歌っています。

遠賀川水系彦山川
(2008.7.7 撮影)

(次は讃井知さんにバトンを託します)